和装家に聞く

タワマン、悠々自適、豊かな趣味、そして「きもの」。理想的なリタイアライフを送っている玉井さん。

今日の和装家は玉井正浩さん

（聞き手／四季誌和装家編集 佐藤正樹）

江戸前の気品があって、洒落っ気のある雰囲気をお持ちの玉井正浩さん、男きもの専門店「銀座サムライ」のお客様で、もちろん和装家に登録されています。今回は「銀座サムライ」までお越しいただいてインタビューさせていただきました。

舞台芸術をはじめ、とても豊かで広がりのある興味、関心をお持ちの方だとお聞きしています。リタイア後の理想的なスタイルだと思います。羨ましいです。

「いえいえ、そんな大袈裟なものではなく、興味のおもむくままです」

オペラやバレエにもきもので行かれるのですか？

「昨日のバレエにはきもので行きました。もちろん洋服の時もありますが、特にお能や歌舞伎の時は天気が悪くない限りきものですね」

「舞台は、演者だけでなく観客も大切な要素ですからね。演出に反応するだけでなくて、何を着ていくかも観客としては大事だと思います」

確かに！演者だけでなく、見る側の衣装もその舞台の構成要素なんですね。ところで、最期に一つだけ見られるとしたらオペラは何を選びますか？

「なごむというなら『フィガロの結婚』でしょうか」

（中略）男きものをどうやって流行らせるか？について、サムライの梅田店長を含めて3人で盛んに談義。

男性できものに興味を持つ方は「個」がしっかりしているなどさまざまな意見が飛び交いました。

「私もそうだったんですけど、きものを着ると人の目がより一層気になる。変な目で見られてるんじゃないかと。でも実は違っていて、きものっていいなと思って見てるんですよね」

「ここで作ってもらったこのきもの、最初、すごいきれいな色だけど、ちょっと女性っぽいかなと思いながら着てみたら、ホテルの人、デパートの人、きれいなきもの着てますねぇとすごい褒めてくれる」

わかる人にはわかるんですよね。

「去年、紅葉を京都に見に行って湯豆腐屋さんに入ったらご高齢の女将から『ええ、べべ着てはりますねぇ、お茶の先生ですか？』って」

50年後にそんなに誉めてくれる人がいるか心配ですよね。

梅田店長「女性のきものの場合、確立したものがあって、なくならないと思いますが、男のきものは誰かが意思を持って伝えていかないとなくなるような気がします。ぜひ、バレエやオペラにもきもの姿で出かけてもらって、男性のきもの姿をたくさんの人に見てもらってください」

定番の質問なんですが、きものをはじめたきっかけを教えてください。

「昨年60歳で退職して、やりたいことの一つがお茶でした。以前にも経験があったのですが、やめていたので。日本文化の一つくらいちゃんと身につけておきたいという気持ちからです。そして同じ白い足袋だし（笑）と思って、お能も習ったんです。そしたら、やっぱりきちんとしたきもの着ないと！と自然に思うわけです」

そしてサムライにたどり着いたわけですね。

「歌舞伎座の前にあった時から存在は気にしていたんですが、いざ、いく段になるとここ（西銀座）に引っ越されていて、とりあえず見にいこうという思いできたら、たまたま知り合いがバイトで働いていたんです。見るだけが、結局一着作っちゃった。そして一着作ると、季節も変わるし、どんどん買い揃えて行っちゃったというわけです（笑）」

この後も男きもの、流行らせ論議に花が咲きました！

玉井さん、いろいろな経験に基づくアイデアありがとうございました。

取材当日、浜離宮での東京大茶会に行かれるということで、同行させていただきました。きもの姿の男性の中で、存在感は群を抜いていました。

多くの和装家が大島紬で田中一村展へ

9月19日から12月1日まで東京都美術館で開催され、大好評を博した「田中一村展　奄美の光　魂の絵画」に、きもの世界遺産アンバサダーの秋庭総子さん、上野貴子さんをはじめ、多くの和装家の皆さんが大島紬をまとって参加しました。当NPOの正会員である大島紬美術館さんと、きものsalonさんの企画による休館日の特別ツアーでした。全参加者は60名を超えたようです。

「アダンの海辺」田中一村 作
制 作 年／昭和44年(1969)
技法･素材／絹本着色
個人所蔵　©2024 Hiroshi Niiyama

きものを着たら、得をする！

あなたの「おなじみのお店」にも
加盟を呼びかけてくれませんか？

詳しくは、ホームページへ「きもの得」で検索！